

新たな人の和・輪づくりへ

園長 児嶋 草次郎

今年の梅の花が一番最初に咲いたのは、1月3日です。マイナス7度の寒風の中で、方舟館東側の梅の木が一輪、凜（りん）と咲いていました。日本スイセンも、今年も馥郁（ふくいく）なる香りを漂わせながら、園庭のあちこちで霜に凍りつきながらも、元気に白い花を咲かせてくれています。

ウグイスも鳴き始めた1月23日、高鍋にお住いだった壹岐弘子様が94歳でお亡くなりになり、葬式に出席させていただきました。これで財津家兄弟7人がみなさん召天されたことになります。一つの時代が終ったと、さみしく実感しております。

私的な話にもなりますが、私の母は、高鍋馬場原の財津家の長女（財津登美）で、昭和19年に父児嶋琥一郎と結婚（届出は昭和21年）し、そして私たち兄弟3人が生まれました。

この福祉事業を始めたのは敗戦の年昭和20年でしたから、最初の頃は支援乏しく生活は施設の子供たちと同じく貧しいものでした。母は体も弱かったので、私たち兄弟3人は、母の実家にあずけられることもあり、この財津家には随分お世話になって来ました。

私が石井記念友愛社の理事長をつとめさせていただくようになり、平成9年（1997年）、石井記念友愛園を改築した際、寄付募集をしてできた和・輪を維持発展させるべく、立ちあげたのが石井記念友愛社後援会でした（私48歳でした）。この時、親身に設立に向けて活動してくださったのが、親族である財津一族の方々でした。

私たちが行政の出先機関に甘んじるのではなく、常に開拓的な民間の社会事業団体であろうとする時、どうしても必要なのは、石井十次がそうしたように支援の和・輪を作ることでした。私には、人脈もなく、人づきあいも上手な方ではありませんでしたので、最初に頼ったのがやはり母方の親族でした。皆さん宮崎県内に住んでおられ、私にとっては信頼できる支援者でした。

すでに皆様天国の人となってしまわれましたが、その伴侶の方々を含めて、ここに改めて感謝申し上げます。財津吉俊様、江藤栄夫様、財津隆斎様、壹岐弘子様、松岡功子様、杉巨子様、ありがとうございました。

以下、第112回石井十次記念式の時の挨拶です。時間の関係で、式の時は省略した部分もあります。

本日は、石井十次記念式に、お忙しい中御出席していただきまして、ありがとうございます。

昨年は、石井十次生誕160年であり、石井記念友愛社創立80周年の年でありました。私たちにとっては、大きな節目となる年でありました。我が国にとりましても、昭和20年の敗戦から80年という節目であり、戦後80年間、戦争に巻き込まれず平和が続いたことに感謝した1年でもありました。

そして今年、2026年、その分岐点を通り越して新たな一步を踏み出しております。ロシアによるウクライナ侵略は、4年になるのに全く収束のきざしはみられません。世界の人々がアメリカにその平和に向けての斡旋を期待しているところに、今度はそのアメリカ自身が、南米ベネズエラに侵略し、大統領を拉致しアメリカの裁判にかけようとしています。

80年前の大戦終了から多くを反省し、法による世界秩序と平和を求め続けて来たはずだったのに、一挙に力による支配の時代に逆戻りし始めたようにも感じます。専門家たちは、「日本も世界も歴史的転換期にある」と述べたりしています。石井記念友愛社は、こういう社会状況の中で、未来に向けてどう歩みを進めたらよいのかを考えたいと思います。

話は変わりますが、今年のNHKの日曜日の大河ドラマは「豊臣兄弟」で、主人公は豊臣秀吉ではなく弟の秀長です。実は、豊臣秀長はこの茶臼原に来ているようなのです。九州の関ヶ原の戦いと言われる「根白坂合戦」です。豊臣と薩摩の島津との戦いで、1587年、秀長が47歳の時です。

そのさらに10年くらい前(1578年)、この根白坂から木城の高城にかけて、島津は大分の大友と戦っています。この時の戦いは壮絶なもので、合わせて7000人位の兵士が亡くなったと言われています。これが「高城合戦」です。勝った島津は、僧300人ほどを集めて亡くなった人を慰霊し、川南に供養塔も建てています。

負けた大友宗麟は、大阪の豊臣に庇護を求めますが、全国制覇をめざす豊臣は、四国を統一した後、九州征伐へ向かいます。20万以上の兵士を二手に分け、秀吉は北九州方面から熊本への西回りルート、秀長は大分から宮崎への東回りルート遠征を始めます。もちろんこちらは秀長が総大将です。大友宗麟は、大阪城へ助けを求めて登城した時、秀長としっかり作戦をねったようでして、日向に入ると島津の立てこもる木城の高城を落すために、周囲に50以上の陣地を築いたそうです。特に根白坂峠は大事な所です。ここからは、木城平野が一望でき、高城周辺の動きが手に取るように把握できるので、おそらく大友は、ここを取ることがこの戦いの勝敗を決めると助言したはずですが、高城合戦の時は、ここに島津が陣を構え勝ちました。

財部城（高鍋城）を含めて、このあたり一帯は島津が当時支配していたわけですから、この根白坂にも島津の陣屋はあったろうと思われます。財部城も根白坂も、どう豊臣軍が奪い取ったかについては、記録にはあまり残ってなく、おそらく前哨戦でも、相当数の人が亡くなったと思われます。

さて根白坂の戦いです。豊臣軍は奪い取った後、ここに頑丈な柵と壕を作って相手の攻撃を食い止め、また柵の間から銃を連射するという戦法を取ります。1575年の長篠（ながしの）の戦いで武田勝頼（かつより）騎馬軍団を撃破した時と同じやり方です。その時は織田軍の3000挺の鉄砲が活躍したそうですが、この根白坂でも同じくらいの数の鉄砲が準備されたのではないかと思います。本格的な合戦に出遅れる形になった島津軍は、この茶臼原の宮田川の南側に陣地を張ることになります。兵の数は豊臣の10万に対して2万余りだそうです。力の差は明らかでまともには戦えませんので、ゲリラ戦法の夜襲戦に依りますが、鐵壁の守りの豊臣軍を打ち負かすことはできませんでした。島津の300人くらいが、銃弾にバタバタと倒れたそうです。おそらく前哨戦も含めると、1000人単位の若者たちが亡くなっていると思います。

この戦いに勝利することで、豊臣は九州を平定し、天下統一へと駆け上るのです。総指揮官豊臣秀長は、兄秀吉を支え導き、No2へと登りつめていきます。

四百数十年前、豊臣秀長が現在の石井記念友愛社から近くの根白坂のあたりを、指揮官として馬に乗って視察している姿を思い浮かべています。

次に明治20年、1887年です。根白坂の戦いからちょうど300年後、石井十次は、この地を理想郷作りのために購入することを決めました。この地の歴史について知らないはずはありません。多くの若者たちの無念の魂の眠るこの荒野を新たに開拓し、子供たちの自立のための教育の理想郷を作ることが、浮ばれなかった当時の若い兵士たちの魂を供養することにもなる。石井十次はそう思ったに違いないと、現在私は確信しています。

先ほどの話にもどりますが、私は豊臣秀長についてはほとんど知りませんでした。そこで正月前後、磯田道史（みちふみ）氏の「豊臣兄弟 天下を獲った处世術」を始め、豊臣秀長に関する本を4、5冊読んでみました。秀吉は、皆様御存知のように貧しい農家の出で、「サル！サル！」と蔑視されながらも、織田信長に仕えて武士として成り上り、天下を取った男です。弟の秀長について私の頭の中にイメージとして出来あがった姿は、秀吉とは全く対照的な性格の男です。

私は、これから世の中を変えるような人は、児童養護施設のような世界から出てくるのではないかと最近言うようにしています。最初に、「日本も世界も歴史的転換期にある」を申し上げました。弱肉強食の戦国時代になると、それまでの価値観は通用しなくなりました。江戸末期、西欧列強が帝国主義でアジアに進出して来た頃も、日本の鎖国は通用しなくなりました。プーチン大統領やトランプ大統領の考え方をみていると、まさに今までの価値観が通用しなくなって来ているようにも感じます。

磯田道史氏は、「今日の日本では、世襲身分を持たず、学歴エリートでもない豊臣兄弟のようなゼロから一を作り出した人物の生涯が参考になります。」と、その「豊臣兄弟」の中で書いておられます。

私は、今まで児童養護施設の子供がどのような施設生活をしたら、それまでのマイナスの人生をプラスの人生に転換できるのかをずっと考えてきました。運命をどのようにしたら変えられるのかを考える時、この豊臣兄弟の生き方、特に弟秀長の生き方が模範になると感じ始めています。それに関して考えたことをとりあえず4点あげてみます。

①まず劣等感はいかに克服すべきものなのか。

劣等感とは、どんな人間でも多少は持っているものですが、2人の出自は別格で、その劣等感はずさまじいものであったろうと想像できます。農業（百姓）の中でも薪売りをしなければ生きていけない貧しさで、特に秀吉の方は体も小さく「サル」とさげすまれ、口べらしのために先に家を出されたのかもしれませんが。磯田氏の本には、多指症であったとも書かれてありました。織田氏につかえていても、最初はどこの“馬の骨”とも分からぬような存在であったことでしょう。秀長も、劣等感に関しては、そう差はないはずです。

群雄割拠の時代、天性の楽観主義もあったのかもしれませんが、努力によって這い上がる例を回りにも見ることもあったのでしょう。昭和20年代の日本の社会状況に似ている面もあるような気がします。今の社会的養護の世界を見ていると、這い上がる力を教えずに、環境を一般家庭に近づけることばかりを国は考えているように感じます。形だけを家庭的にしたからと言って、劣等感を克服できるわけではないでしょう。やはり自ら克服する力を身につける（自信をつける、自己肯定感を身につける）以外ないと思います。劣等感を克服しようと努力する姿こそ価値あるものとする知恵を教えていかねばなりません。ただ権利主義だけで立ち向かおうとすると、敵は増え、ますます自分を追い込んでいくようになるのではないのでしょうか。

②這い上がろうとする力をいかに身につけるのか。

昔も今も、皆が這い上がろうと努力するわけではありません。貧しさに安住してしまっただけで、貧困の連鎖から抜け出せない家庭も多いのです。時に今の時代は、社会的な支援も多く、生存ギリギリまで追いつめられることはそうありません。私たち団塊の世代は当時みんな貧しく、それぞれの家庭が生きること必死で、あの手この手を使って、よじ登ろうとしていました。

ハングリー精神は這い上がろうとする時必要であり、劣等感を克服しようとするスポーツや労作作業がその方法ということになるのでしょうか。志を抱かせることも重要です。一時的に物質的に満たしたからと言って、この力が身に付くわけではありません。社会的養護の世界だけではなく、一般家庭においても、物質的に豊かな時代が続き、このような自立心がだんだん弱くなって来ている部分があ

るのではないのでしょうか。不幸なのは、自分の劣等感の原因をすべて親や社会に押しつけ、克服しようとするどころか復讐心を募らせ、犯罪の世界に身を落していくことです。豊臣兄弟の場合、織田の家来になったという運の良さもあったのでしょう。出会いは、運命を変えるにおいて重要です。出会いを出会いだと感じさせる感性を育てることも必要です。

③崖をよじ登った後、人生を生きるにおいて、どう自分を律していくのか。

劣等感を克服して、崖をよじ登る力を身につけさせてあげること、これが石井十次の時代からの教育の神髄でしょう。象徴的な写真が、藤島武二のライオン教育の絵をバックにする石井十次と少年が対座した写真です。おそらく社会に自立する少年に、その心構えを話しています。『岡山孤児院教育によって、もう十分に自立力は身につけた。これから、感謝、プラス思考、志を持って生きていけ』と。

豊臣兄弟の場合、兄と弟でその自律力は対照的です。兄の秀吉は、主（あるじ）である織田信長と弟の秀吉が活着している間は自分を律していましたが、二人が死ぬと、ほとんどコントロールができなくなり暴君となってしまいました。おそらく、劣等感の裏返しでしょう。

それに比べ秀長の方は、No2 になってからも、しっかり自分を律して生きています。「思慮深く」・「温厚柔和」というような人物評が定着していたようですし、52 歳で大和郡山城（100 万石）で亡くなった時には、20 万人の見物人が野に山にあふれたとか。その冷静・篤実な生き方は、おそらく彼のことを尊敬していた徳川家康にも引き継がれていったことでしょう。

大小はあるにしろ、ここを巣立っていった子供たちの人生も様々です。運命を乗り越え、幸せを勝ち取った先輩たちは、親や社会に言いたいことはいっぱいあったのだろうけど、その劣等感を克服して、人格者として生きておられます。

④和や輪はどのようにつくられていくのか。

戦国時代、一人で戦えるわけではなく、いかにその戦う集団を作れるかで運命は決まります。豊臣兄弟には、「この人について行こう」と思わせるすぐれた才能があったのでしょう。特に秀長には、横暴な兄秀吉と屈強な家来たちとの間をうまく調整する力が誰よりも勝っていたのでしょう。

社会に貢献する何らかの活動をしようとする時、この和・輪を作る力が問われます。福祉の世界はまさに人々の和・輪を作る仕事。私が石井十次から一番学んだことは、この部分かもしれません。飲み友達を、あるいは趣味の友達を多く作ったからと言って、それだけで和や輪ができていくわけではないでしょう。主義主張や価値観を越えて人の集団を作ろうとする時には、そのリーダーの包容力が問われるのかもしれません。統率力は豊臣兄弟両方にあったでしょうが、秀長が亡くなった時、ある高僧が秀長のことを「靄然（あいぜん）として仁有り」と評したそうです。論語の、「泰にして驕らず」・「意なく、必なく、固なく、我なし」のような人格だったのでしょう。

石井十次記念式の日になぜこのような話をするのか。石井記念友愛社は、保育園も含めて、児童福祉施設が主であり、子供の養育・教育に責任を持った法人であります。歴史的転換期において、国や地域を導いていける人材を育てることを使命としているということを自覚し直して、再スタートしたいと考えたのです。石井十次がこの地でやろうとしたことを、こういう価値観の錯綜している時だからこそ、愚直にその理念、方針を守り、社会貢献していきたいと思います。そのことを墓前においてお誓いし理事長としての挨拶させていただきます。